

江戸から明治の自然科学を拓いた人－伊藤圭介没後100年記念シンポジウム－,
2001年9月10日, 31 pp., 名古屋大学附属図書館編・刊, 名古屋

伊藤圭介と動物

名古屋大学博物館教授 西川 輝昭

(1) はじめに

ホヤ類やヒル類などの分類学者として、また進化論関係の多数の著述で有名な丘浅次郎は、日本初の網羅的な動物図鑑である『日本動物図鑑』（北隆館、1927年刊）の序文において、「理科方面の学科は多くは明治維新後ににわかに輸入せられ、特に動物学のごときはその前にはほとんど何もなかった」と記している（現代的表記に改めた）。つまり、日本の伝統的な本草学・博物学と近代的動物学との間には深い断絶があったとの見解であり、それは現在広く認められているようである。動物分類学にたずさわり、日本列島に生息する生物の人間による認識・記載史に関心をもつ私にとっては、この「断絶」の実態解明は避けられない課題である。

植物分類学の泰斗牧野富太郎（1941）が、「本草学の大家として……大海の中に毅然として立った島……として棹尾の勇を大いに奮われた」とその晩年を評した伊藤圭介は、この課題にとって最も重要な人物といえよう。このようなわけで、圭介が書きため孫の篤太郎による部分的増補を経て今日に伝わる、動物に関する未刊の稿本類を細々ながら調べてきた。そこで出会った「蝦夷フレチ説」を中心として、圭介と動物とのかかわりのほんの一端を紹介したい。なお、内容の一部は西川（1995）と重複することをお断りしておきたい。

(2) 「蝦夷フレチ説」

国立国会図書館蔵『錦窠魚譜』の巻号不明の一冊（登録番号：別11-11-17）に、「蝦夷フレチ説」と題され、末尾に「文久壬 [1862年] 冬日錦窠伊藤圭介識於市谷邸舎」と記された一章がある。草稿とその清書からなり、いずれも冒頭に、「蝦夷舎利浜ニテ寒風暴波ノ候赤色蚯蚓 [ミミズ] ノ如キ物ヲ海岸ニ打揚ル事アリ此品方言フレチト称ス……多氣志楼主人ソノ乾腊ノ品ヲ余ニ贈レリ……」と記されている。乾燥標本の図も添えられ「長七寸」（約21cm）との書き込みがある。多氣志楼主人とは、伊勢出身で「北海道」の命名者として知られる探検家松浦武四郎のことである。

続くページにある伊藤篤太郎による1940年のメモに示唆され松浦の『戊午知床日誌』をひもとくと、1858（安政5）年初夏の知床半島踏査中に発見した「フレチ」の正体について、松浦は何人かに問い合わせていたことがわかる。『日誌』には阿部喜任、山本錫夫（京都の著名な本草家で松浦の師山本亡羊の二男）、および圭介の回答が紹介されているが、ここから明らかに、上記「蝦夷フレチ説」は松浦への回答の草稿と控えであろう。

松浦によれば、「フレ」は赤い、「チ」は腸のことで、魚の腸に似ているためである（しかし、更科・更科（1976）は「チ」の別義を挙げてこれに反論している）。地元では干して「腎薬」（滋養強壯剤）として使うという。フレチがよくうち上がることから「フレチウシ」という地名が出来たとするが、この場所は「現在のウトロに近い、オシンコタンの滝の近く」にあるという（更科・更科、前掲）。

幕末江戸の著名な博物学者である阿部喜任の回答は、羽田あたりの漁師さんがヒラメ釣りの餌にする「和名為（い）」、つまり、現在、ユムシ動物門の1種に分類されているユムシであろうとした。

一方圭介は、ユムシとは「其形稍異ナリ是ヲ以テフレチニ充ルハ妥ナラズ」として「ウミミミズ」（イソメやゴカイの仲間、環形動物門多毛類を指すらしい）に最も近いものとした。

(3) フレチはユムシ

フレチの正体は何か。北海道立網走水産試験場の栗原康裕氏のご教示によれば、道北稚内周辺では時化の後に長さ20cmほどのユムシが大量に浜にうち上がり、これを現在でも地元では「フレチ」、「フレッチ」、「フレツ」あるいは「フレツツ」と呼んで食用にするという。ここから判断する限り、圭介よりは阿部の鑑定に軍配が上がりそうである。

フレチの正体と思われるユムシは、平安時代以来「い」（幕末になって「ゆ」とも）と呼ばれ、釣り餌や食料として親しまれてきた海の動物である（西川, 1995）。日本列島の他、朝鮮半島とロシアのそれぞれ日本海沿岸、および中国山東半島にも生息している。近代動物分類学における認知、すなわち世界共通の学術的命名（＝学名の創設）は、オーストリア人 Richard von Drasche によって1881年になされた。*Echiurus uncinatus* というのがその学名で、名古屋大学医学部の基礎を築いたオーストリア人医学者ローレツ（Albrecht von Roretz）が「南日本の東岸」で採集してウィーンの王立博物館に送った2個体に基づいている（Drasche, 1881）。この標本（シタイプ）は現在もウィーン自然史博物館に保管されており、私も今春、名古屋大学学術研究基金の援助を得て行った標本調査で、それを確認した。なお、本種の学名は、その後 *Urechis* という新しい属が1908年に提唱されたのにもとない、*Urechis uncinatus* と変更されている。

ところで、東京大学総合研究博物館には、日本における近代動物分類学の草分け時代の標本の一部がかろうじて残されている。ユムシの液浸標本も数本あるが、そのひとつ、池田岩治（後の京都帝大教授）が瀬戸内海で1882年7月に採集した標本に、*Echiurus* の仲間の新属新種であろうという趣旨の英文メモが添えられていた（西川, 未発表）。しかしこのメモを書いてから間もなく、池田は Drasche が一足早く1881年にすでに新種として発表していたことをおそらく該当論文の掲載誌によって知ったはずである。その標本びんに貼られたラベルには、*Echiurus uncinatus* Drasche と書きつけられ、小さなドラマの終末を示している。日本列島にすむ動物の名付け親にその住人自身がなるには、あとしばらくの時間が必要だったのである。

(4) ハハリノヒモからホシムシへ

「蝦夷フレチ説」にもどると、圭介は彼の「ウミミズ」の1種として、漁師さんが鯛釣りの餌に使う「ハハリノヒモ」にも言及している。名古屋大学附属図書館蔵の『錦窠蟲譜』第6巻には、「ハハリノヒモ……全身淡褐色頭少シ黒キ帯フ髭ノ如キモノアリ……豎横粗キスジアリ蚯蚓 [ミズ] ノ如シ漁人は採テ鯛ヲ釣ルエサト為ス……知多郡海中泥ニ居ル穀雨ノ節又日庵ヨリ来ル」として図が添えられている。これはたぶんスジホシムシ *Sipunculus nudus* かスジホシムシモドキ *Siphonosoma cumanense* のことと思われる。引用文中の「又日庵」は、尾張藩の国家老をつとめた渡辺又日庵（ゆうじつあん）ではなかろうか（その略歴は吉川（1993）を参照のこと）。

引用したとおり、標本の記載は簡単で外部の特徴に留まり、大きさにも言及がない（描画が原寸大ということかもしれない）。内部形態を調べた形跡がないことに、磯野（1989）が指摘した江戸本草学の弱点が現れている。なお、上記の図とうりふたつのものが、尾張の本草家吉田高憲の『吉田平九郎稿蟲譜』（国立国会図書館蔵、7-178）にある。後者には解説文がまったく付されていないから、原図は前者であって吉田のはそれを模写したものと想像されるが、詳細は今後の分析に譲る。

ともあれ、この動物は現在、星口動物門に分類され、この門に属する動物はホシムシ（星虫）類と総称される。これら和名のおこりは、口の周辺にはえる触手（上記の「髭ノ如キモノ」はこれを指すか）を星にみたてたドイツ語の Sternwürmer の直訳らしい。しかし、スジホシムシやスジホシムシモドキの大きさ、形、あるいは縦横に走る筋肉によって体表が四角の小部分に分けられている様子は、太い糸で織られた“羽織の紐”がびったりである。これ

が和名として生かされなかったのが惜まれる。

(5) おわりに

伊藤圭介をはじめ江戸から明治の本草家がのこした動物関係の大量の稿本類は、標本が伴っていないという欠陥をもちつつも、現代的なさまざまな観点からの活用を待っている。データベース化などを含めて、調査研究の進展を願ってやまない。

引用文献

- Drasche, R. von 1881 Ueber eine neue *Echiurus* -Art aus Japan nebst Bemerkungen über *Thalassema erythrogrammon* S. Leukart von der Insel Bourbon. Verhandl. k.-k. zool.-bot. Ges. Wien 30: 621-628.
- 磯野直秀 1989 日本の博物学、慶応義塾大学日吉紀要、自然科学7:18-29.
- 牧野富太郎 1941 伊藤圭介先生、無閑之(むかし) 48:3-7.
 (「続」が49号 pp.4-8と50号 pp.4-6に掲載されて完結)
- 西川輝昭 1995 ムシ・イムシのルーツを訪ねて—動物和名の一考察、海洋と生物 17:512-517.
- 更科源蔵・更科光 1976 コタン生物記Ⅱ. 法政大学出版局、東京。
- 吉川芳秋 1993 医学・洋学・本草学者の研究、八坂書房、東京。